

永久欠番、ティーポット

私のお気に入りのガラスのティーポットは、底が丸く可愛らしい形をしていた。底が丸まっていることで、お湯を入れた時に茶葉がくるくると回って、風味が良くなるらしい。使っていて、そんなことを実感したためしはないが、全体が薄いガラスでできているので、茶葉にお湯を注ぐと、透明なお湯にめらめらと琥珀色がたちのぼるのがよく見えた。そんなところがとても好きだった。

ある日、ティーポットは死んだ。正確に言うと、私が殺してしまった。理由は些細なことであつたと思うが、そのときは自分のコントロールをすっかり失っていて、むしろくしゃした気持ちをそのまま、流しの横に乾かしてあつたティーポットにぶつけた。最期は、ガシャンともパリーンとも音を立てなかったような気がする。一瞬にして強烈な力で床に打ちつけられたせいで、中から静かに爆発して、粉々になってしまったみたいだった。ティーポットはびっくりするぐらいに細かく割れて、散らばつたガラス片が、かつて持ち手だったのか、底の部分だったのか、皆目見当もつかない。全てはただのガラス片になってしまった。私はそれらを一晩片付けることができず、床一面がきらきらと光るキッチンとともに一日を過ごした。

何でも失うときには音がない。確かにあつたはずのものが消え、空いた部分には思い出と痛みだけが残る。この世に一定不変なものは何一つない。全ては、些細なことから驚くほど形を変えてしまつて、泣いても喚いても、元のものが戻ってくることはない。今回は、色々な偶然が重なり、ティーポットが私の激情の犠牲になった。

友人がやってきたときに、丁寧な暮らしを気取りたくて、寝る前に淹れて出したカモミールティー。私は紅茶派だつたのに、好きな人がコーヒー派だからと、ティーポットをサーバー代わりに使つて淹れたドリップコーヒー。一人で仕事をする時にいつも淹れていた、アールグレイ。ティーポットはガラス片に戻つたが、それらの時間は失われることはない。おそらく新しいティーポットを迎え入れることになるだろうし、そちらの方が使い勝手が良いということもあるだろう。しかし、失われたものは、記憶の中だけに生きるので、記憶の補正や改竄を経て、永遠に『比較』のステージから降りることができる。いわば唯一無二の永久欠番になる。私が壊したのも、ただ失つたものも、澱のように私の中に溜まっていき、確かに私の構成要素の一つになっている。ティーポットも、其処に肩を並べるだけだ。

静かな私の部屋には細かいガラス片が今でも残っていて、時折足の裏に鋭く刺さる。